デュッセルドルフ大学現代日本研究所主催シンポジウム
「日本のポップカルチャー：その潜在力と展望」開会挨拶

２０１６年５月２０日
総領事　水内龍太

３週間前に「ドコミ」に参加した際は、周りの衣装が余りに違って戸惑ったが、今日は私と同じような人々なので安心している。その後ライニッシェ・ポスト紙が書いた記事によれば、私はマンガ第一世代の学生として、マンガでドイツ語を勉強したことになっている。それが故に尚更、今日お招きいただいたことに感謝。

日本の若者文化という現象が、いつから「ポップカルチャー」を取り込む形で理解されるようになったのか、今では思い出せない。本来ポップカルチャーというのは、「大衆文化」を意味していた。それは、特別な知的作業を要さずに、大衆に対し楽しみを提供するいくつかのジャンルの集合体のことであり、映画、ＴＶドラマ、ポップミュージック、恋愛小説、キャバレー等の舞台芸術等、皆ポップカルチャーに属し得る。

私が外交官補としてドイツ語を勉強していた８０年代を振り返ると、ドイツでも当時ある種のポップカルチャーが発生しかかっていたと思う。例えば、ＴＶドラマ・シリーズの「Schwarzwaldklinik」（黒い森病院）とか「Traumschiff」（夢の客船）、更には NENA のような、当時のドイツにおける新たなポップミュージックなどがこれに当たる。因みに私は、NENA の歌でドイツ語を学んでいた。最近、当時の彼女の歌の一つが話題になっているが、それは、ある人を題材にしたパロディーとしてである。近頃はドイツ刑法の所謂「外国国家元首不敬罪」で訴追されないように気をつけないといけないので、「名前を言ってはいけないあの人」とでもしておこうと思う。その歌の冒頭の韻を踏む部分「Im Sturz durch Raum und Zeit, Richtung Unendlichkeit」（空間と時間に吸い込まれ、行き先は無限）というのが大変気に入っていたし、エンディング（Irgendwie, irgendwo, irgendwann）もまた良かった。パロディーのエンディングは、たしか・・・「Voldemort」だったですかね。

こうした新しい形態の文化は、私の見る（又は聞く）ところ、世界的現象となる潜在力（今日のシンポジウムのテーマ）を有していた。実際、NENA の「99 Luftballons」（９９の空飛ぶ風船）はアメリカのヒットチャートに乗っただけ

でなく、東京のカラオケバーのナンバーとしても、数少ないドイツ語の曲として収録されている。

この時以来、ドイツと日本のポップカルチャーは別々の道を歩んだ。なぜそうなったのだろうか、と思う。おそらく、そのうち１つは、幾ばくかの「クールなフィーリング」を持っていたのだが、もう１つはそうでなかったのだろう。残念なことだ。そうでなければ、今頃私は日本で、知独派として、「現代のドイツのポップカルチャー」というテーマで講演をすることができていただろうから。

ポップカルチャーの本質について、１つだけお話ししておきたい。それは、「ポップカルチャーの世界とは、どの程度現実的であるか」ということである。例として、ドイツの刑事ドラマ・シリーズ「Tatort」（犯行現場）を挙げたい。私の印象が間違っていなければ、３０年前の「Tatort」の中では、殺人事件が起こる状況は今よりもっと単純に計画されていたように思う。犯行の動機も同様である。昨今の「犯行現場」では、人間の心理状態がより重要な役割を果たしているように見え、またプロットはより複雑に、より精巧になっているのだが、ＴＶ番組紹介雑誌で「迫真的」と予告されているほどでもないように思われるし、普通の人の感覚、少なくとも私の感覚とはちょっと違うのではないかと思う。

日本の刑事ドラマについても同じようなことが言える。御存じかどうか、日本の民放５局、それに公共放送を加えると、毎日どこかのチャンネルで刑事ドラマが放送されているのだが、これを現実に当てはめると、毎週警視庁では６つの特別捜査チームが同時に犯人を追いかけていることになる。これって現実的なのか、それともその逆なのか？　少なくとも統計を見る限り、日本における犯罪発生率は、依然として非常に少ない。これがたぶん、冒頭の私の設問、「ポップカルチャーの世界とは、どの程度現実的であるか」への答なのではないか。

つまり、ＴＶはＴＶ、現実は現実、ということで、このことはアニメやマンガでも同じようなものだ。しかし、日本のポップカルチャーの本来の力というものは、信じられないほどのイマジネーションと熱狂をファンに与えることができる点にある。そうでないと、若者達がなぜこれほどにコスプレやその他の活動にコミットできるのか、想像がつかない。これこそがポップカルチャーの力、あるいは「潜在力」ということであり、本日のシンポジウムのテーマとなっている。そこで私としては、シンポジウムの成功を祈ることとしたい。私の

以上の解釈がその趣旨に多少は合致したものであり、的外れでなかったことを希望する。最後に、私のささやかな願いを表明して私の挨拶としたい。すなわち、「ポップカルチャーよ永遠なれ」。